もしも願いがかなうなら

桃井 ヨシキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも願いがかなうなら

【Nコード】

N6224P

【作者名】

桃井 ヨシキ

【あらすじ】

何でも願いを叶えてくれる魔人にした、ある男の願いとは。朧の昔話です。

鼓動が早いのに、全身から血の気が引いていた。息を吐くように言葉が口から漏れた。

「本当だったんだ」

視線を落とす。手元に落ちた漆塗りに金細工の施された手鏡が月明かりに照らされていた。金細工の部分がキラキラと光を放っていた。フリーマーケットで買ったものだ。何で買ったのか、理由は未だによくわからない。三百円という値段設定のためでもあったけど、気が付いたら買っていた。

店主のおばさん曰く、満月にかざして、朧さま御出てください、といえはなんでも願いをかなえてくれる魔人が現れると言っていた。無論、冗談だと思っていた。

ただ今日は綺麗な満月だった。買った日以来、机の中にしまっていた鏡のことを思い出し、出来心でやってみた。魔人さんが出てきたらかなえて欲しい願いもあったから。

視線を戻す。僕の前には、黒地に真っ赤な彼岸花が染め抜かれた浴衣を着た少女が立っていた。体つきは華奢で肉付きも薄い。少女と向かい合う形だ。もちろん何の面識もない。綺麗な鼻筋に猫のように丸い目をしている。この娘が噂の朧さまなのだろうか？

「……私を呼んだのはお前か？」

年相応の少女の声だがどこかに重みがある。僕は大きくうなずくと口を開いた。

「朧さま？　ですか？」

「いかにも、願いを言え」

朧と名乗った少女は胸元から黒い扇子を取り出すと広げた。金で蝶が描かれている。朧が持つと絵になるな。そんなことを考える事が出来るほど、僕は不思議なことに落ち着いていた。こうなることを期待していたからだろうか。

「早速ですね」

「それが仕事だ。面倒くさいから、こちらから聞く。かなえて欲しいのところを頷け」

いきなり本題を切り出した。臃にとっては何度も経験済みの場面なのだろう。やっつけ仕事この上ない。

「偉くなって、金が欲しいのか？」

地位も金も僕は欲しくはない。僕は首を大きく振る。

「綺麗な女と付き合いたいのか？」

もう一度首を振る。綺麗な女も必要ではない。

「穏やかな家庭を築きたいのか？」

僕は首を振った。僕が三回、首を振ると、臃さまは急に黙り込んで俯いた。小声で何かつぶつぶ言っている。僕のほうを向くとその目には困惑の色が見て取れる。

「質問に答えてくれないか？ お前、見たところ二十代だな？」

「ええ、二十歳です」

臃は大きな唸り声を上げている。納得できないように首を何度も振っていた。そりやそうだろう。僕の望みはこの中に一つもないのだから。

「何故、偉くなりたくない？ お金が欲しくない？ 男なら誰しも望むだろう」

「偉くなるって面倒じゃないですか。大勢の人間の人生背負うなんて嫌です」

「お金は？」

「大金持ちになってどうするんですか？ いざという時の蓄えだけあれば十分です」

この前、テレビで社長のドキュメンタリーを見た。偉くなると部下の生活を考えないといけない。前向きでアグレッシブ、肉食獣のように獰猛でないと生きていけない。お金もそう、多く持っていたって何の意味があるんだろうか。今の僕はネットがあれば十分だ。平凡に暮らしていける金があれば十分だ。

「綺麗な女は？」

「人付き合いが面倒くさいんです？」

生身の女性と付き合い合うよりもネットで動画をしたりゲームをする。気の合う仲間と話が出来れば満足だ。恋人も欲しくない。

「穏やかな家庭は？ 子供がパパと迎えてくれるんだぞ？」

「今の世の中、子供を育てるってキツイです」

子供をつらいことの多い世の中に産み落とすのだ、子供を産むのは犯罪だ。少年事件も多いし、きつちりとした子供を育てるのは大変で責任が重過ぎる。

「じゃあ、何が望みなんだ？」

僕は自分の望みを口にした。これさえ適えば他に何も望まない。願いを聞いた臍は目を丸くして僕を見つめている。扇で口元を隠しているが手先は小さく震えていた。

「それでいいのか？」

僕の予想したとおりのことを臍は口にした。別にかまわない。願いが適うのなら代償としては払ってもいいものだ。躊躇うことなく承諾の言葉を口にしたこれで長年の願いがかなう。その喜びが全身に満ちていた。

「構いませんよ」

「なんでだよ」

眩きが私の口から漏れた。月明かりに照らされた男の顔は眠っているようだった。その顔は青白い、私は顔を撫でて首筋に手を当てた。脈はない、息絶えていた。

「楽になりたいです。殺してください」

男の言葉が私の脳裏によみがえる。何でそんなことを願うのか。死ぬば楽になるのは事実だ、だけど納得できない黒い霧のような疑問が私の中で渦巻いている。魔人なんていう因果な種族に生まれついた私は、多くの人の願いを叶えてきた。金銭欲、色欲、人間のいるんな欲望を満たし、その欲望を糧として生きていた。それが魔人

の生き方だと、そう祖母から言われた。

だが欲望を満たしているときの人の顔は魅力的だった。金儲けをしているときの商人の顔、女と付き合っているときの少女の顔、みんな活力が満ちていて、その顔を見ていると私も元気になれた。私は寄生虫のようなものだ。宿主が元気だと私も元気になれる。魔人と人間は共生するもの、そう思っただけ生きてきた。

「どうせ生きてたって先が見えてるんです。今は楽しいし充実しますから、さっさと死にたいです。自殺だと迷惑かけますからね、自然死で」

この男はそういつて死を望んだ。死を望んだのはこれで三人目だ。男の欲望が流れ込んでくる。活力も湧いてこない欲望だった。死ぬ事がこの男の望み。悲壮感も絶望感もなく自らの生に見切りをつけた。胸が錐で刺されたように痛む。

人の命は儚いと思うけど、人の命を絶つほど虚しいことはない。冷え切った茶を飲むときのような味気なさを感じていた。

「生きていれば良いこともあるだろうに」

私の呟きはこの男には聞こえない。聞こえたとしても辛いことのほうが多いですよと答えられるだろう。むなしさが私の全身を包んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6224p/>

もしも願いがかなうなら

2010年12月21日01時10分発行